

猿投窯産の風字硯に関する一考察

－猿投窯・都城跡出土資料を中心に－

井川瑞季

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

猿投窯産の風字硯に関する一考察

－猿投窯・都城跡出土資料を中心に－

井川 瑞季

1. はじめに

風字硯は古代に使用された陶硯の一種である。平面形が円形で水平の硯面をなす円面硯に対し、風字硯は平面形が漢字の「風」字状をなし、背面に通常2つの脚を付し硯面を傾斜させる形態的特徴をもつ。奈良時代に出現し、それまで普及していた円面硯に取って代わる形で平安時代をピークに普及した。平安時代中期になると石製硯が登場し普及していくことによって風字硯は衰退していったとされ、現在も使用される長方形硯の原型といえる。平安京跡での出土数が特に多く、これまでに150点以上の出土が報告されている。その材質は多様であり、須恵器製をはじめ、灰釉・緑釉陶器製、黒色土器製、中には石製のものもみられる。本論で扱う灰釉陶器風字硯は尾張国で8世紀中頃から生産が始まる灰釉陶器のうちの一器種である。規格性のある装飾的な内堤をもつ点が特徴でその中には木目や範傷とみられる痕跡が確認できるものもある。そのため、猿投窯で生産された風字硯は型作りである可能性が考えられる。

本論では愛知県猿投西南麓古窯跡群(以下「猿投窯」)内の窯跡及び、風字硯の主要な供給先である平城京・長岡京・平安京などの都城跡から出土した灰釉陶器風字硯を対象に分析を行い、その特徴や同範関係の有無について検討していく。

2. 型作りの硯

硯の製作技法に関しては、宝珠硯が型作りであることが指摘されている。宝珠硯とは、平面形が宝珠に似ていることから命名された硯種である。奈良時代末から平安時代初頭にかけて生産されていた硯で、檜崎彰一氏は宝珠硯について、「猿投窯のみで生産された特殊な硯」と指摘する^(注1)。中でも平城京出土の宝珠硯は3種類の範に分かれ、平城宮内から出土した宝珠硯は、京城を超えて長岡京や興福寺一乗院、薬師寺西小字坊出土品と同範である

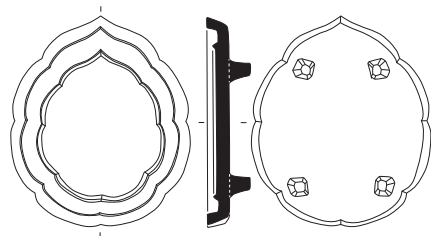


図1 宝珠硯模式図

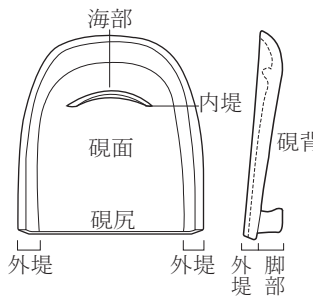


図2 風字硯の各部名称

ことが判明しているほか、興福寺出土品が黒笹40号窯出土例と酷似することが指摘されている。^(注2・3)

風字硯については、平城京出土の風字硯が型作りであることが報告されている。加えて、猿投窯産であることも指摘されているが、明確な根拠は示されておらず、詳細な分析等も行われていない。^(注4)

以上のように、奈良時代末期に登場する宝珠硯は、猿投窯においてのみ生産された特殊な硯種であり、消費

遺跡においては、地域を越えた同範関係が明らかになっており、型作りであることが確実である。さらに、平城京出土風字硯が猿投窯産であること、型作りであることから、猿投窯で生産されていた風字硯が宝珠硯と同様に型作りの可能性が推測される。このことを踏まえ、実態の検証を行っていく。

3. 範傷のみられる風字硯の分析

今回、分析の対象とした資料は、すべて筆者が実見した資料である。窯跡群内で報告されたすべての風字硯を分析対象とするには至っておらず、今後も継続的な調査を行い、資料数を増加させていく必要があることは先に述べておく。なお、風字硯の各部名称は図2のとおりである。

今回分析に用いた風字硯は、灰釉陶器風字硯のうち、

- ①内堤をもつもの、またその周辺に装飾を施すもの
- ②硯面に木目や範傷が残るもの
- ③硯頭部が側面まで良好に残存するもの

この3点のいずれかに該当するものを対象とした。資料数は、猿投窯において8点、消費



写真 風字硯にみられる木目や範傷

地である都城においては平城京内で3点、長岡京内で1点、平安京内で12点の計24点である。各風字硯の特徴を観察表に示した。なお、表中の番号は図4・5と対応する。消費地における風字硯の年代は、遺構の共伴遺物によるもので廃棄年代を示す。分析から明らかになった特徴について、形態的特徴と時期的特徴の2点に

分けて述べる。

(1) 形態的特徴

形態的特徴の1つとして、外堤が硯面に対し垂直に付くのではなく、外開きに付いていることがいえる。また、木目や筈傷の多くは硯面、特に内堤部付近に顕著に確認でき、外堤部や背面にはほとんど見られない。木目や筈傷は、風字硯の長軸方向に沿って確認されることから、風字硯の筈は長軸方向に木目を通る木製で、硯面を原面とする板に内堤を掘

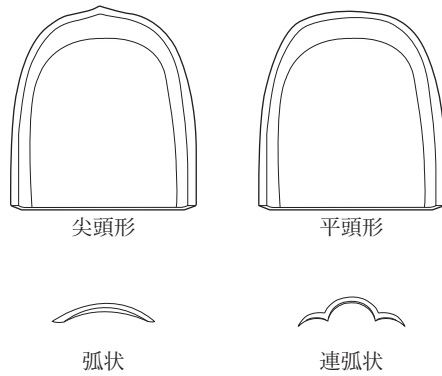


図3 各属性模式図

りこんでつくられたと考えられる。すなわち、猿投窯では、型作りによる風字硯の生産が行われていたといえる。一方で、猿投窯黒笹89号窯で出土している内堤をもたず木目や筈傷を確認できない風字硯もあり、猿投窯産風字硯が全て型作りであるとは判断し難い。有堤風字硯の年代は8世紀中頃～9世紀後半に位置づけることができ、その後は内堤を持たない無堤風字硯が主流となる。無堤風字硯が出土した黒笹89号窯は、9世紀末～10世紀前半の窯跡とされており、有堤風字硯が衰退した時期にあたる。すなわち、形の複雑な宝珠硯や有堤風字硯は型作りで生産され、その後、有堤風字硯が衰退し無堤風字硯が生産されるようになった際に、型作りの必要性がなくなり、猿投窯における型作りによる硯の生産が終了した可能性が考えられる。

硯頭部と内堤部に着目すると、属性を抽出でき、硯頭部の形は大きく2種類に分けることが可能である。1つ目は硯頭部の中心が突出する尖頭形、2つ目は硯頭部が硯尻に対し平行である平頭形である(図3)。これは檜崎分類^(注5)において「変形硯」「定型硯」、山中敏史氏の分類^(注6)で「花頭」「平頭」と分類しているものである。また、内堤部の形態は、弧状の内堤をもつもの、弧が3つ以上連続する連弧状のもの、内堤をもたない無堤のもの3種類に分けることができる。

内堤をもつ風字硯に木目や筈傷が確認できる例が多いことから、有堤の風字硯が共通して型作りである可能性を想定し検討を行った。平安京左京八条四坊一町跡や白河街区跡から出土している有堤の風字硯は、硯面に粘土を貼付けて内堤を成形しており、成形も粗雑である。外堤の内側や硯面はナデ調整が施され、木目や筈傷は確認できないことから、有堤の風字硯すべてが型作りによる成形ではないといえる。また、どちらの資料も須恵質で猿投窯産とは考え難く、型成形による宝珠硯や有堤の風字硯の生産は、猿投窯独自の製作手法であった可能性が高い。

風字硯観察表

No.	出土遺跡	内堤	木目 範傷	裝飾	年代	特徴	出土遺構	文献	
1	猿投窯 黒笹4号	○	○	不明	8世紀末～9世紀初頭	弧状の内堤/内堤・硯面に長軸方向の範傷・木目/硯背に降灰		注7	
2	猿投窯 黒笹7号	○	△	○	長岡京期～9世紀初頭	尖頭/弧状の内堤/硯頭部外堤の内側から硯面に伸びる3条の突帯線/硯面側の一部・硯背に軸/硯面に重ね焼き痕/脚貼付け		注8	
3	猿投窯 黒笹14号	○	○		9世紀前半	平頭/3連弧状の内堤/硯面に長軸方向の範傷/硯背に軸/脚貼付け		注9	
4	猿投窯 黒笹14号	○	○		9世紀前半	平頭/3連弧状の内堤/硯面に長軸方向の範傷/硯背に薄い釉/軟質		—	
5	猿投窯 黒笹14号	不明			9世紀前半	平頭/硯背に軸/軟質		注10	
6	猿投窯 黒笹89号	×			9世紀末～10世紀前半	平頭/硯面に重ね焼き痕/硯背に軸・ケズリ/端部ケズリ/脚貼付け		注11	
7	猿投窯 岩崎窯か	不明	○	○	—	平頭/硯頭側の外堤内側に4条の突帯線(復元5条)・範傷/硯面に長軸方向の木目/硯背に釉		注7	
8	猿投窯 不明(本田コレクション)	○			—	平頭/弧状の内堤/硯面に長軸方向の範傷/硯背に軸		—	
9	平城京 式部省東・東面大垣地区	○			8世紀後半	弧状の内堤/硯面に範傷/硯背に軸	SD4951 最下層	注4	
10	平城京 内裏東方官衛地区	○	○		8世紀末	円頭または尖頭/弧状の内堤/硯面に範傷か/硯背に軸	SD5406	注4	
11	平城京 左京一条四条三坪				9世紀前半	平頭/推定3連弧状の内堤/硯面に長軸方向の範傷/硯背に薄い釉	SD650A	注12	
12	長岡京 左京四条一坊十一町(第353次)	○	○		9世紀前半	3または5連弧状の内堤/硯面に長軸方向の範傷/硯背に軸	落込み SX35317	注13	
13	平安京 左京二条四坊十町	○	○		10世紀半ば～後半	3または5連弧状の内堤/外堤内面から硯面に伸びる1条の突帯線/硯面に長軸方向の範傷/硯背に軸	2区井戸 2097	注14	
14	平安京 左京三条一坊四町	○	不明		8世紀末～9世紀初頭	硯尻部/硯面と側面外堤の境に範傷/硯背に軸/脚貼付け	湿地帯	注15	
15	平安京 右京三条一坊三町	○	○		不明	9世紀半ば～10世紀末	3連弧状の内堤/硯面に長軸方向の範傷/硯背に軸	整地層 SX283	注16
16	平安京 右京三条一坊六町	○		不明	9世紀半ば	3連弧状の内堤、中央の弧が尖頭/硯面に長軸方向の範傷/硯背に軸	池370	注17	
17	平安京 右京三条一坊六町	○		不明	江戸時代	推定5連弧状の内堤/硯頭から硯面に伸びる1条の突帯線/硯面に長軸方向の範傷/硯背に薄い釉	溝151	注18	
18	平安京 右京三条二坊十六町		○	不明	9世紀後半～10世紀末	硯尻部/硯面に木目/硯面・硯背に軸	3区池1	注19	
19	平安京 右京三条三坊四町	○		不明	9世紀初頭	弧状の内堤/硯背に降灰	SD12	注20	
20	平安京 右京三条三坊五町	○			9世紀初頭～半ば	硯尻部/硯面に木目/硯背に軸	溝80B	注21	
21	平安京 右京六条三坊	○			—	3連弧状の内堤、中央の弧が尖頭/硯面に長軸方向の範傷/硯背に軸	不明	注22	
22	平安京 右京六条三坊	○			—	硯尻部/硯面に範傷/硯背に軸	不明	注22	
23	平安京 右京七条一坊十二町	○			10世紀半ば	硯尻部/硯面と側面外堤の境に範傷/硯背に軸	溝512A	注23	
24	平安京 右京七条二坊十二町	○	○	不明	—	3連弧状の内堤/内堤硯尻側が二段/硯面と側面外堤の境に範傷/硯背に軸	SK25	注24	

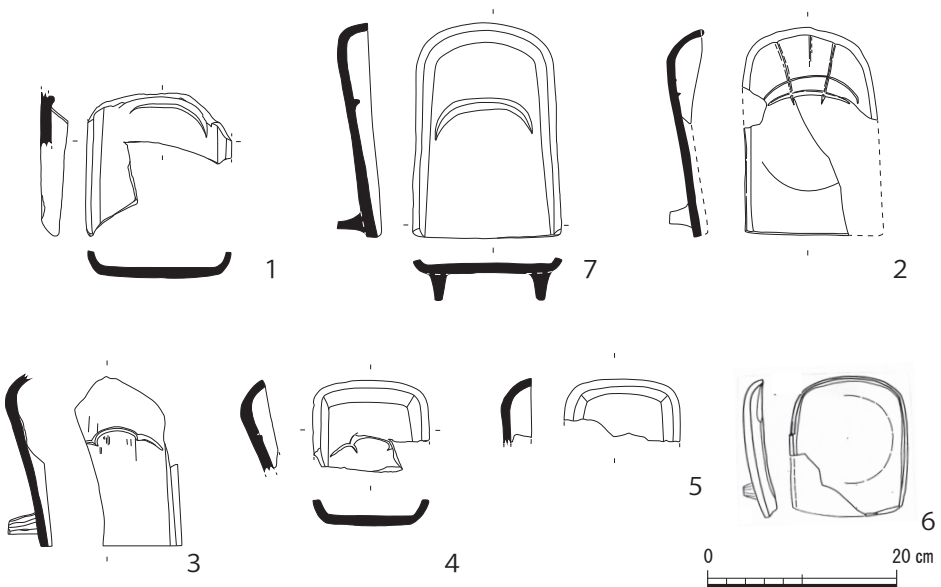


図4 猿投窯跡出土風字硯(S=1/8)

(2) 時期的特徴

窯や遺構の年代に着目すると、形態的特徴に時期的な差異が存在する可能性が見えてきた。先にも述べたように、内堤をもつ風字硯、すなわち檜崎分類における有堤式にあたる風字硯は、8世紀末～9世紀前半に集中して生産された形態といえる。さらに細かい変化を見ていくと、根拠となる資料は少ないものの、硯頭部が尖頭形から平頭形への変化が想定できる。今後の資料増加によって生産時期幅が変化する可能性があるが、尖頭形は8世紀末から9世紀初頭にかけて、平頭形は9世紀前半に出現する形態として位置づけられる。

内堤の形態は、弧状から弧が3連ないし5連に連なる連弧状へと変化する。装飾性に富んでいくとみられ、中には中央の弧の頂点を突出させたものも認められる。また、連弧状の弧の数は必ず奇数である。弧状内堤は8世紀後半以降に、連弧状内堤は9世紀前半以降見られる形態といえ、硯頭部の形態が変化する時期とほぼ並行して内堤の形態も変化していることがわかる。

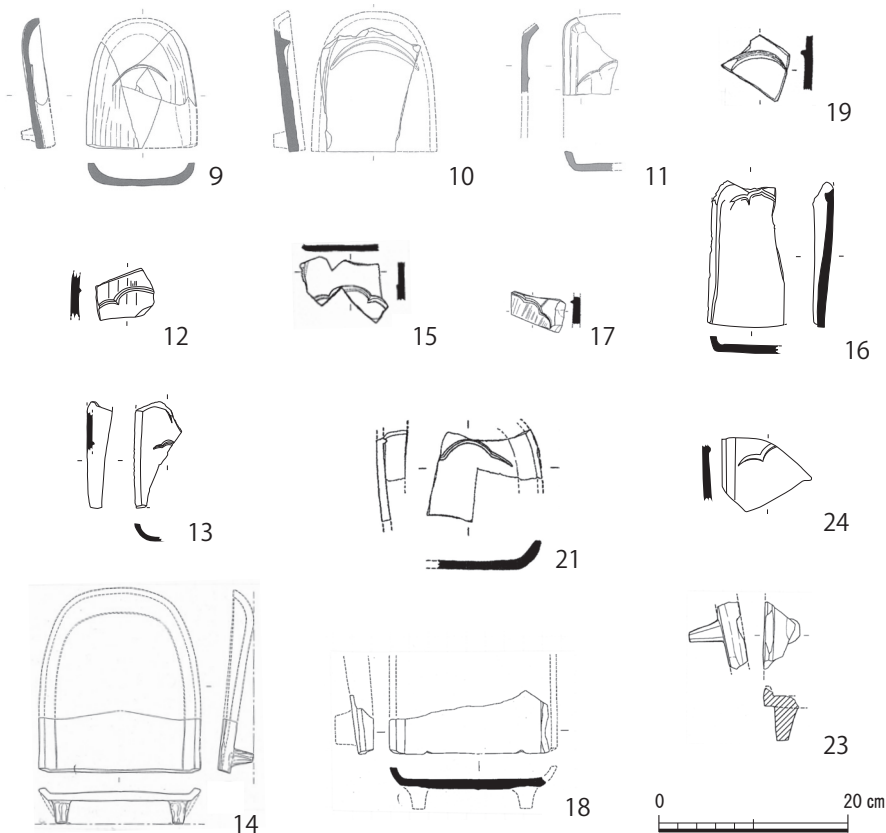


図5 都城跡出土風字硯(S=1/8)

4. 同範関係の検討

分析の結果、同じ形態の内堤をもつ風字硯を複数点確認した。これらの資料について、同範関係が確認できるか検討してみたい(以下、括弧内の番号は図4・5に対応)。

まず、猿投窯黒笹14号窯では、風字硯が3点出土している。3連弧状の内堤をもつ2点(3、4)は、内堤の弧の形が一致せず異範といえる。残る1点(5)は内堤部が欠損するが、共通して残存する硯頭部の横幅の法量が一致することから2点(4、5)は同じ型による成形である可能性が高い。次に、黒笹4号窯と出土地不明の本多コレクション(以下「本多コレクション」)はいずれも弧状の内堤をもつ風字硯であり形態が酷似する(1、8)。黒笹4号窯の風字硯は、硯面に範傷や木目が明瞭に残り、また、範の転写に失敗したのか、内堤の一部が欠けている。内堤が硯面の中央付近に位置する特徴的な形態であり、本多コレクションと内堤の幅や、残存する硯尻から内堤までの距離が一致することから、同範品である可能性が高い。これはすなわち、本多コレクションが黒笹4号窯で生産されたものである可能性が高いともいえるだろう。また、本多コレクションに確認できる木目や範傷は少ないことから、本多コレクションの生産が、黒笹4号窯出土風字硯の生産よりも古いといった生産の新旧関係も想定できる。

消費地資料としては、長岡京跡左京四条一坊十町(左京第353次)出土(12)と平安京右京三条一坊三町跡出土(15)の風字硯について、残存する内堤形態や範傷の位置が一致しており、同範である可能性が極めて高い。いずれも内堤付近のみ残存する資料であるものの、内堤形態の複雑さから全く同型の範を製作することは困難と考えられ、同範関係を検討するうえで重要な部位といえる。また、平安京右京三条一坊六町跡出土(16)と平安京右京六条三坊跡出土(21)の風字硯は、3連弧状の内堤で中央の弧が尖頭するが、内堤の法量が異なることから異範品であると考えられ、少なくとも2種類以上の範の存在が想定される。

以上、今回分析対象とした風字硯の中で同範関係を検討し、一部の風字硯について内堤の形態から同範・異範関係を認められる事例を紹介した。風字硯における同範・異範を判別する上で重要な判断基準となるのは内堤部やその周辺に残る範傷といえる。一方、今回対象とした資料中には生産地と消費地で同範関係が認められる風字硯はなく、今後も資料の集成と実見を進め対象資料を増やしていきたい。ただし、本論で扱った風字硯のうち、平城京から出土している風字硯については、脚部の形態や貼付け位置が従来の風字硯と異なっており、猿投窯所産のものではない可能性も考えられる。これについては今後、別稿で述べることにしたい。

5. おわりに

本論では、猿投窯跡及び都城跡から出土した灰釉陶器風字硯を対象に、風字硯が型作りである可能性について分析を行った。風字硯の硯面にみられる木目や範傷、外堤の形態などから、猿投窯において、宝珠硯だけでなく風字硯についても型作りによる生産が行われていたといえる。そして、複雑な形をなす内堤は、同範関係を検討するうえでの1つの指標になることが指摘でき、一部の資料に同範・異範関係を認めることができた。

有堤風字硯は、ある一定の時期に生産された形態であり、その時期は8世紀末～9世紀前半に位置づけられ、硯頭部の形態や内堤の形態からは、さらに生産時期を限定でき、今回の分析における1つの成果といえる。

猿投窯産の風字硯が型作りであった理由については、風字硯以前から型作りで生産されていた宝珠硯の存在が大きいだろう。西口氏は猿投窯でのみ宝珠硯が生産された理由について、仏事に関連した発注が固定化したものと指摘している。^(注25)ろくろを用いて成形する円面硯に比べて宝珠硯は形態が複雑であり、型作りにすることで形に規格性をもたせ、精巧さを確立でき、時間的な製作コストも削減できるといった利点があったと考えられる。それが風字硯の生産にも引き継がれたのではないだろうか。風字硯が国内の各地で生産された硯種であることを踏まえると、尾張猿投窯産の灰釉陶器というブランド性とその精巧さにおいて、他地域でつくられる風字硯とは差別化され、当時の貴族に好まれたと考えられる。

本論では、風字硯の生産面に焦点をあてて検討を行った。生産地を限定できる灰釉陶器の風字硯に絞って検証を進めたが、他地域の窯においても型作りの風字硯が生産されていた可能性については検討できておらず今後の課題としたい。今後も多角的な視野をもって検討を行い、古代における硯の生産・消費の実態について迫っていく所存である。

(いがわ・みずき = 京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

注1 橋崎彰一1985「古代陶硯に関する一考察－有孔把手付円面硯と宝珠硯－」『名古屋大学総合研究資料館報告』第1集 名古屋大学総合研究資料館

注2 西口壽生2010「東海産の陶硯について－蹄脚円面硯・宝珠硯を中心に－」『奈良文化財研究所紀要』(独)国立文化財機構奈良文化財研究所

注3 松田留美1997「長岡京出土の陶硯」『都城』8 (財)向日市埋蔵文化財センター

注4 (独)文化財研究所奈良文化財研究所 2006『平城京出土陶硯集成I－平城宮跡－』奈良文化財研究所史料第77冊

注5 橋崎彰一 1981「日本古代の陶硯－とくに分類について－」『考古学論考 小林行雄博士古稀記

念論文集』平凡社

- 注6 山中敏史1983「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』No.41 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
- 注7 五島美術館1978『日本の陶硯』
- 注8 東郷町教育委員会1992『猿投窯一黒笹7号窯跡発掘調査報告書』
- 注9 愛知県教育委員会1980『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』(I)
- 注10 愛知県教育委員会1957『愛知県猿投山西南麓古窯址群』
- 注11 (財)愛知県埋蔵文化財センター1994「黒笹40・89号古窯跡 黒笹G2号古窯跡 立楠古窯跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第56集
- 注12 (独)文化財研究所奈良文化財研究所2007『平城京出土陶硯集成Ⅱ-平城京・寺院-』奈良文化財研究所史料第80冊
- 注13 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1996「2. 長岡京跡左京第353次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第69冊
- 注14 (財)京都市埋蔵文化財研究所2001「平安京左京二条四坊十町」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第19冊
- 注15 (有)京都平安文化財2019「平安京左京三条一坊四・五町跡」『京都平安文化財調査報告』第5集
- 注16 (財)京都市埋蔵文化財研究所2002「平安京右京三条一坊三町(右京職)跡」『京都市埋蔵文化財研究所調査概報』2001-3
- 注17 (財)京都市埋蔵文化財研究所2013「平安京右京三条一坊六・七町跡一西三条第(百花亭)跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2011-9
- 注18 (公財)京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京三条一坊六・七町跡、壬生遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2020-10
- 注19 (財)京都市埋蔵文化財研究所2002「平安京右京三条二坊十五・十六町一「齋宮」の邸宅跡一」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第21冊
- 注20 (財)京都市埋蔵文化財研究所1990「平安京右京三条三坊」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第10冊
- 注21 (公財)京都市埋蔵文化財研究所2018「平安京右京三条三坊五町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2017-15
- 注22 古代学協会2004「平安京右京六条三坊」『平安京跡研究調査報告』第20輯
- 注23 (公財)京都市埋蔵文化財研究所2019「平安京右京七条一坊十二町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2018-12
- 注24 (財)京都市埋蔵文化財研究所2011「23 平安京右京七条一・二坊、西市跡」『昭和52年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 注25 前掲注2に同じ